



遊びの心理について

波多野完治

「幼児のあそびの心理」。最近の幼児心理の傾向について話を少しして、あとの半分位をその傾向と関連させて遊びの心理について話をしたいと思います。

現在幼児心理の領域で大変大きな革新が起ろうとしています。というのは、ソ連の幼児心理学が発展して来ているからです。今までの幼児心理は、大体においてアメリカ風の幼児心理でありました。

これは、こまかい観察に基づいた幼児心理で分析を余りやらず、もっぱら観察に基づいて幼児心理を発展させてまいりました。この傾向は、子供が何才位のときは、何をするか、どういうふうにするかはよく教えてくれるがどういふわけでそうなるのか、ということや、また、もう少しこういふ風にしたいが、それは良いのであろうか、悪いのであろうか、成功するかどうかの見当をつけるのに困ります。グローバルの観察は環境的条件、家庭の経済的条件等の条件と幼児との関連は、法則化するが、どういふわけでこのようになるか、あまり教える事がありません。要するに幼児は発達するのだと

いう事になります。つまり発達という事実そのものをア・ブリーオリに予定するのです。

これを補う為に説明の原理、フロイド派の精神分析があります。これは人間の精神生活の発展を仮説でわりきる。このために種々の事が起って来ます。例えば、三才〜四才に反抗期があります。反抗期の存在は観察すれば分る事ですが、それがなぜ起るか。これをエディップス・コムプレックスが働いて、反抗期が起るといふ風に説明するのがフロイド学派の考えであります。

一般的にいふとゲゼルの現象的なものを精神分析でおぎなうのが今までの幼児心理学である。

問題はこの二つの傾向が幼児心理をたてる上に良いかどうかということになる。ソ連の立場では二つとも充分でない。もっと新しい立場をたてたいと考えた。そうしてその考えがヨーロッパ中に広まって来ましたか数年のうちにアメリカにも広まり、幼児心理学の革新が起ると思われれます。ソ連ではゲゼル風の考え方は、幼児心

理にならないと考える。ある家庭的の条件があると、子供はどのように変わるかは、教育学としてはそれで良いが、心理学の法則としてはある外的条件が子供の心理の内的構造をどういうふうに変化させるか、これからのような反応を起していくか分らなければ科学とは云えない。子供は外的環境のみで作られるものではない。外的環境は、内的環境に転化し、その内的構造の為精神構造を変化している。外的なものとの内的なもの相互交渉をみなければ、子供の心をとらえられない。ゲゼル式のもの、機械論的なものであるというのであります。またフロイドの学説を觀念論という。しかし、私の立場から云うと、觀念論でも唯物論でも要するにその学説によって科学的に子供を解明できるかどうか問題である。

フロイドのものは都合が悪いとわたしはおもう。と云うのは、フロイドの考え方は人間の主観的狀態感情の生活はわりによくとらえる事が出来るが、知性の生活をとらえる事が留守になりがちであります人間が本當の生活をしていくためには知性を働かさなければなりません。フロイドには快樂原理と現実原理という説がある。

快樂原理は子供が生れた時もっているが、現実原理によりしばらく。この現実原理が人間を社会的に仕上げていきます。この考えによりフロイドのものがよいとは云えませんが、よほどおきないにはなるとおもう。フロイド主義を幼児に適應する人々は、欲求不満をみるため、感情を重くみることにしこの欲求不満の解消ばかりを考えるために知性が留守になります。世の中の社会生活、物質生活の二つを通して子供が適應をやっています。この適應は、単に

一方的に環境に対して適應するのではなく、子供が、それとは逆に向きをかえて自分で考えたり父母に働きかけたりする方向があります。適應が充分に出来ないために欲求不満が起ります。すなわちフロイド主義は幼児の一番大切な働きは何であろうか。どのように伸ばすかについて、価値の転倒(十の価値に八とおいたり、又その反対を置いたりする)が起っているのではないか。これが、ソ連の考え方であります。フロイドの立場は性本能、攻撃本能に重点が置かれている。性本能が重視されることは幼児の精神生活において基本的なものであるが、幼児の場合、はたしてこっちの方が一番重たいといえるかどうか。知性のはたらきの方が大切なのではないか。このような面の転倒が起ると教育にもひびくし、又幼児の精神生活の理解は、ゆがんだものになるゆえフロイドの学説はとれないのです。

ソ連はどのように考えるかと申しますと、二つの基本的な点があげられます。第一に幼児の精神生活は生れた時から、社会的なものだということです。

一般的には幼児の精神生活は自己中心性を基本的性格としてとらえています。この考え方はソ連の考え方はとりません。社会的なもの、現れ方は発達により変わってきます。赤ん坊が生れたときは泣く表情は間違える事がないくらい表情的であります。赤ん坊の泣き声一つをとっても社会的表現の一つである事は疑うことはない。ソ連の学者やフランスの学者は考える。更に子どもが大きくになると家族関係を意識してくる。この時代はフロイドの方ではエディプス・コンプレックスを意識してくる時代で、面白い行動をやる時代

である。ソ連に近いフランスのある学者はこの時期をComplexの時代と云っています。この時代において父母を意識する社会的なものが発達します。幼児は、これに反抗します。しかしその反抗の結果として社会性が生れて来ます。

第二としては、感覚の優位・感性的優位でこれは幼児心理学ではない。正統派の実験でいわれた事と同一であります。幼児は感覚的であります。これは幼児においては感覚を求める方向をとります。そして、何だろうという、物をさぐる気持ちに転回します。これが探究反射です。感覚の追求は人間を感情生活におぼれさせます。この時代の精神生活は感情的主観的であります。しかしこれは幼児に本質的であるかどうかは分らないとソ連の学者は考えるのです。外の物を認識する力を適当に導いていけば外のものをつかむのがはつきり出てきます。もう一つの点は従来のもので幼児が感覚的であるがゆえに言葉と結びつける事は、重要視していなかったのです。しかしソ連の心理学では幼児の感覚とともにコトバを重大視する点であります。

三才と六才は第一信号系の優越において第二信号系が発達してくるのが特徴であります。幼児の言葉は生々としていますが、大人の第二信号系すなわち言葉は意味だけがとり出され、生々した感情内容の方は摩滅されています。幼児は第一信号系にそのまま結びついた第二信号系(言葉)を使っています。この事が大切なのです。

感覚の基礎の上に言葉をよく見ていく事はソ連の心理学の大きな功績であります。今までの幼稚園・小学校によくいわれた事は為す

ことにより学ぶという事でありました。要するに言葉はどうでも良かった。環境の良い子など言葉が発達していますがこれは今までは別に知能がのびている事とは無関係に考えられていました。一々千迄云えたとしてもそれをつかめているわけではありません。が、二・三の数の体系が結びついて数についての第一信号系と密接になって発展していれば知能がそれだけのびています。今までは言葉を軽視していました。これはブラクマティズムの偏見であります。

今後幼児の指導をする場合、今までもよりも言葉を重視しなければなりません。幼児の思考がのびるために言葉を上手に使用させ論理的なものを導いていく必要があるのです。言葉だけを上手にするのは無理で、感覚の基礎の上に言葉を発達させるのです。

この立場から遊びについて少し考えてみましょう。遊びは人間の心が発達していく上に大切であります。この点が条件反射の点で面白い問題であります。遊びが、人間の精神生活に大切かどうかははっきりしていません。今まではあそびは仕事程大切ではない。あそびは仕事に展開していくための準備であるという考え方がありました。ところが、フランスの学者(ソ連に影響された)一才と三才の間は遊びが大切なのは遊びを通じて自分を物から引き離して自分と物との間に距離をおくことがあるので、この点で遊びが大切なのだということがわかりました。条件反射は生れてすぐはじまります。例えば牛乳の入ったコップを見ると飲みたくなります。しかし、こういう条件反射ではコップと水を飲むという事の間には距離がありません。遊びの場合、コップはたたくと音がするという風になると

コップは単に水を飲むものではなくなって来ます。お互いがお互いに独立変化化する事が分るためにはコップといろいろな行為とを引離して距離をおく事が大切であります。この距離をおく作用が起るのは第一にあそびであり第二には模倣であります。幼児は模倣の場合そっくりと同じにまねているという意をもっているときとないときがあります。模倣は意識なしに行われると自分では似ているつもりでも実際には似ていない場合が多い。似ている意識は子供の心にとどまっている。進んで来ますと似ていないと不快になり技術をかえる。そこで模倣により物と自分との間に距離が出来てきます。

子供は想像遊びが中心です。想像あそびにおいてはある程度まで物の性質を想像により理解します。コップを水に浮して舟と考える。コップをみてそこにオモチャの行いの間にさかいを置いていきます。これは人間の認識の発展に大切です。というのはある程度物からはなれなければ物の全体のすがたは見られないのです。遊びは我々の中にこれをやらせてくれます。この遊びは二才過ぎてから活潑化して想像あそびに変っていきます。又構成あそびに変っていきます。構成あそびは模倣に結びつけその世界をつかみます。すなわち外の世界を自分の作ったものと違うという事を意識させます。遊びは積木あそびなどのように新しいものを作り上げていく事が大切であります。これは大人の場合も同じであります。この立場から幼児の絵とか積木をながめるとき精神分析かと感情生活を見る面が多い。幼児の感情のしこりすなわち欲求不満がどのように発展しているかはむずかしい事でありませす。しかし、そのために幼児の絵とか

積木に認識的契機が全然ないという事は誤りである。客観的なものが入っている。では指導はどうあるべきでしょうか。指導がいらぬということば云えません。今迄の指導は間違っています。間違っているより、やらない方が良いわけになります。認識の発展を助ける指導を発見するのがこれからの問題であります。大人のもつ図式的なひからびたものを、幼児にそのままたえる事はいけない。が、大人のもつ図式的なものが全くいけないかというところではありません。大人のもつものでも御手本があります。これを幼児にあたえるときにどのような形でやるか問題であります。まるっきり放任の指導は行われていいとは思いません。

正しい指導とはどういうものなのでしょうか。生活の指導をすれば良いと云われますが、子供の欲求不満をこわがれば子供のケンカも心配しなければならぬ。欲求不満が神経症を起すわけではありません。ここに欲求不満の解消の仕方の問題が起ってきます。ソ連の考え方で動揺した原理は神経質に導くのに最もよい。父母の間、家庭と幼稚園の間の違い、これが幼児に動揺をまねきます。不満解消の仕方が方針をもっていけば神経質になる事はありません。一九五〇年からこの点で幼児心理が新しい段階に入りました。

フロイド派の弱点修正も必要でありましょう。我国にもフロイドの考えはひろまっております。フロイド派は家庭教育の面で意味がありますが行きすぎると駄目であります。最近の幼児心理の傾向はこの点われわれに深い反省をうながすものがあるとおもひ、ソ連のうごきを中心におはなしました。(お茶の水大教授)